

ンサートが世宗文化会館で行われることを知った親友の張 武鉉氏が、私のためにチケットを手配してくれて、私は初めて彼女をこの目で見、彼女の声をこの耳で聞いたのです。

それはそれは、すばらしい体験でした。コンサートホールに入る前から、私は長年離ればなれになっていた恋人に再会するようなときめきと興奮を覚え、気分は高まる一方でした。ロビーでコンサートの運営を手伝っていた「ソニーファン（李 仙姫ファンの意）」の女性から、李 仙姫の直筆サイン入りCDを譲ってもらい、新しいBEST版CDを買い求め、ますます気分は高揚していきます。そしてステージに登場した李 仙姫を見た時には、思わず隣にいた張 武鉉氏の肩をたたいて喜びを露わにしました。そのコンサートの約2時間は、もう決して忘れることができません。今思い返しても、その感動がありありとよみがえってきます。

確かにコンサートで披露された楽曲は、すべて繰り返し聞き込んだ私の耳になじんだ曲ばかりでした。しかし、生で見、生で聞く彼女の歌声は、私の五感のすべてに入り込み純粋な感動を与えてくれました。プログラムも後半になると、周りの観客達と一緒に立ち上がり、ともに楽曲を口ずさみ、それはまるで熱いライブの様でした。彼女の代表曲でもあり、コンサートの最後の曲「美しい山河」では、民族や国、性別や年齢の差を超えて会場がまさに一つになる大合唱の渦でした。彼女のデビュー曲でありアンコール曲でもある「Jに」では、彼女自身マイクを会場に向けてくれ、私たち観客もそれに応え、想いの結晶を作り上げた気持ちになりました。まさに、私の好きな韓国の人々と私が一つになった得難い一時でした。ちなみにコンサートのあと、ホップ（ピアホール）で飲んだビールの味が格別だったことは言うまでもありません。次の機会には、大学路（テハンノ）にある李 仙姫のライブハウス「LIVE小劇場」を訪ねてみたいと思っています。

私の場合、心を揺さぶられるまでの感動を与えてくれる歌手は、韓国の女性歌手だったのですが、なにもみなさんにも海外にそれを求めよと言

うつもりはありません。国内にもきっとみなさんの「世界一」があるでしょう。ただ、広く世界を見聞きすることで、得られる高みは必ずあると思います。機会があれば、みなさんの「世界一」をうかがってみたいところです。

## 悲しみは夏雲の下に サイパン島訪問記

法学部  
河原誠三郎

爆撃機はいつも南からやってきた。翼は朝日で銀色に輝き、ぼくらに向かってきた。その度ごとに、ぼくらは家を捨て、裏山へ逃げた。

ぼくはいまその南に、南の島、サイパンにきている。あのB29爆撃機が、日本本土空襲へ発進を繰り返したその場所だ。

名古屋空港で飛行機に乗り込んだ時、その離陸待機中のエンジン音にぼくは恐怖を覚えた。そうだ、この音だった。一万メートルの高空から落ちてくる、切れ目のない、周波数の異常に高い音だった。ぼくはすぐにも乗務員に機種を確かめたかった。人生の初めに聞いたあの大型長距離爆撃機を製造した同じ会社の757機だった。

いつかはここへ来たいと思っていた。憧れの島ではない、遊びのための島でもない。ぼくらの若い父達が、空しく戦い、玉砕という勇ましい用語で美化されてはいるが、その実、見捨てられて死んでいった小さな島だ。ぼくは、短い旅の一昨日、ここに着いた。

ぼくらのホテルは島の西、珊瑚礁に沿った海岸

にある。見下ろせば、台風16号で頭をもぎ取られた椰子の下の青いプールでは、朝日を浴びて早くも幼児が父親とはしゃいでいる。ラグーンのあちこちでバナナボートが軽快に走りまわり、ダイビング練習中の日本の若者達のタンクが浮き沈みしている。引率された小学生の列は、水に入ったばかりだ。

あの子供達は、この海岸が「ランディングビーチ」と呼ばれていることは知らないだろう。ヨーロッパでノルマンディー上陸作戦が始まってすぐ後の6月15日の朝9時前、日本軍の防衛戦を珊瑚礁越しの艦砲射撃で攻撃した後、アメリカ海兵2個師団、歩兵1個師団の第一派8,000人が上陸を開始した海岸だ。その日、反撃の夜襲があった。激戦だったといわれている。ラグーンの中には上陸用舟艇から落ちた戦車の黒い影が見える。海岸には赤さびた日本軍の戦車もある。

ぼくは、ホテルの部屋を出て、まぶしい光のなか、海岸を北へ歩いていく。名も知らぬ熱帯の林に沿って白い渚が遠く遠く続いている。艦載機の爆音、横たわる多数の死者や負傷者、乗り上げた舟艇、陸揚げされた兵器や補給物資、射撃音、叫喚、砲声。北フランス海岸の実写フィルムや映画『プライベート・ライアン』などで見たことのある、あの修羅場の切羽詰まった場面がこの一帯で繰り広げられていたことなど、想像もできないほど、いまは整地され、物一つなく、ただ波だけが、静かに穏やかに平和を楽しんでいるかに見える。

ぼくは、一昨日、午前中をこの海岸で過ごした。水は温かく澄み切っていて、シュノーケルをしながら、一週間前にうけた鼻中隔手術の成功を幾度も確かめ、健康であることの喜びを初めて知る思いだった。潜水を繰り返しながら、この健康が続くことを願った。

午後早く、戦場巡りのツアーに参加した。日本人ばかり10人ほどだった。中に、年寄り夫婦が一組と、北支から復員したぼくの叔父ほどの年齢と覚しき人がいた。ぼくはすぐに、背筋の通ったその老人と声を掛け合うようになった。「娘が一人では危ないからと付き添って来ている」と、その

人はよろめきながら初めに言った。島の南部中央の、黒木隊が全滅した場所に建つ鎮魂碑の前で、ガイドの説明を聞きながら、ぼくは、彼が大正12年生まれで、満ソ国境に派遣された工兵隊の学徒兵だったことを知った。「工学部を出ました」と言って、墓碑代わりの無反動砲の砲身を何度も撫でた。「ガダルカナルでもアッツ島でもトラック島でもレイテでも、多くの人が死にました」と、一息に言って、溜息をついた。その悲しげな表情から、彼はもう、硫黄島をはじめラバウルもブーゲンビル島も、遠いタラワ島でも、もしかしてインパールでも同世代の若者達の鎮魂を済ませているかもしれないと思った。

艦砲射撃でなぎ倒されてもしたかのように、猛烈な風で太い枝が折れて垂れ下がる森を抜け、島の南へ向かった。いま国際空港になっている辺りの西側一帯が、当時日本海軍の飛行場だ。1944年の7月9日、米軍はサイパン占領の宣言をした。占領後まもなく重爆撃機隊が移駐してきた。ぼくらの行く道路に沿って、あの爆撃機の駐機場が夏草に埋もれながら並んでいる。重い車輪が沈まないようにと固めたコンクリートが60年を経た今も、真新しい。焼夷爆弾を腹一杯に詰め込み、夜明け前つぎつぎに離陸して、小笠原諸島沿いに日本攻撃へ向かったはずだ。一部は沖縄を北上し、長崎、佐世保を空襲して、ぼくらの上空を通り、博多、小倉、八幡を爆撃したに違いない。ぼくは、荒れ果て、階段だけが残る日本海軍司令部の正門前に立ち、西の丘を見やった。丘を回って機影を次々消していく編隊の残像を、そして6時間半後空襲警報のサイレンの鳴る中逃げまどう女や子供達の姿を見たように思った。大阪からの疎開が遅れていたなら、ぼくも同じ運命だったかもしれない。

ツアーの終わりは、島の南西端、アギンガン岬だった。日本軍も米軍もここの荒い海に突き出た突堤から、物資の陸揚げをしたという。サイパン水道を隔てて、西10キロには、我々日本人には忘れられないテニアン島が見える。真っ平らの黒い島だ。8月3日守備隊1万5千人の玉砕後、北の端の飛行場から、「エノラ・ゲイ」が広島へ、「ボツ

クスカー」が長崎へ原爆を抱えて飛び立った。兄嫁の姉は長崎で被爆した。通り過ぎたばかりの16号の影響で、島はここサイパン以上に荒れている、ツアーは中止、連絡の船も出ない、飛行機も飛ばない、と言われ、渡ることを諦めた島だ。しかし、ぼくは内心諦めきれずにいた。打ちつける波しぶき越しに、忘れまいと目を凝らしていた。シャッターも押し続けた。



きのうは朝から雨模様だった。18号が生まれそうだと、テレビニュースは言っていた。午前、ぼくは島の北の端まで行こうと思った。3ドルで一日乗り放題という切符を買い、まずパウパウビーチの「ホテル・ニッコー」へ向かい、そこからバスの終点「マリアナ・リゾート&スパ」まで行った。そこで大急ぎで昼食をすますと、待っていたタクシーに飛びのった。

平坦な一本道だった。ウェストコート・ハイウェイといまは呼ばれている。3方向から追われた日本軍は、民間人と共にこの路を北上したはずだ。島の端まで行けば助けが待っていたかのように。進退窮まった人々は、一部はマッピ山へ向かい、女達は子供を抱いたまま、切り立った断崖から150m下に次々身を投げた。ぼくはインド人の若い運転手に時々停車してもらい、その高い崖を見上げた。最後の司令部があったという場所も見た。大砲が空しく空へ向いている。第43師団司令官斉藤中将が割腹自決し、真珠湾攻撃時の機動部隊司令長官であり、今は中部太平洋方面艦隊司令長官としてサイパン島を守備していた南雲中将がピストル自決した洞窟も近い。中將は自決前、海軍葬



送歌『命をすてて』を歌い、「守備隊に与うる訓示」で、「止まるも死、進むも死、皇国の弥栄を祈念すべく敵を求めて発進す。続け」と読み叫んだ、と歴史にある。

ぼくは、よくDVD『映像の世紀』を見たくなる。20世紀初めのベル・エポックと呼ばれた幸せの時代から時は暗転し続け、アウシュビッツの虐殺や原爆の悲劇を経てベトナム戦争まで、前世紀と言うにはあまりにも身近な時代に起った、とりわけ悲しい出来事を実写フィルムで見せてくれる。ぼくが悲慘さに耐えきれず泣き出しそうになり、家族の手前、いつも慟哭を抑えに抑える場面がある。「菊水作戦」に従って、滑走路の端で最後の盃をあげ、黙々とゼロ戦へ向かう特攻隊員の若い姿を目にする時だ。フィリピンで「武蔵」も「山城」も「扶桑」も撃沈され、最後の空母4隻は沈没した。勝敗はすでに決まっていた。勝ち目の少しもない作戦をつぎつぎ遂行させた参謀本部、海軍軍令部の非情さに腹が立つ。勇者ぶることもなく黙然として散ろうとする若い命がいとおしい。冷静に命を捨てうるのだから、生き残っていたら、という思いが胸を打つ。このときぼくはいつも、特攻隊員として出撃し沖縄で死んだ母の従弟の話を出すのだ。「痩せた、きれいな子だったよ」と母はよく言っていた。有為の青年でもあったろうという思いがぼくの胸を締め付ける。この文章を書きながら、いまも目は涙でいっぱいになる。

若者の命は尊い。若者をこんな仕方育ててはならないのだ。ヒトラーの緒戦の電撃作戦で捕虜となった何十万というソビエトの兵隊達、スター

リングラードの敗北で捕らえられたヒトラー軍は將校も兵も、氣落ちもせず羞じらいも見せず、堂々と歩いて後送されていたではないか。パターンの米軍捕虜達もまたそうだ。「生キテ捕虜トナル者ハ一人モアルベカラズ」、「生きて虜囚の辱めを受けず」などは一兵卒への戒めではない。政策の失敗を戦争という非常手段で乗り越えようと計画した者、開戦の号令を發した者、そうした上層部自身こそ受けるべき言葉だ。

中将二人は、指導部の者として、この島で守備作戦を司令した者として責任はとるべきであったろう。自決はよし。しかし、部下の兵や民間人には、生き残り、再起はかれ、と勧めるべきではなかったか。参謀本部は自ら救援の路を絶ったのであれば、グアムでもビアクでも玉砕などさせず、捕虜となることを命令すべきではなかったか。

日が陰った。北の方角にスコールの氣配が感じられた。ぼくはあわてて車にとび込むと、「バンザイクリフ」へ向かうように言った。



異様な光景だった。様々な形で、鎮魂碑が建っている。戦後、痛ましさに耐えきれず、ひとびとは集まって碑を建てた。これさえなければ、明るい光、広い草原、どこまでもつづくプルシアンブルーの海、心地よい風、花々の美しい南の島へ来た喜びが感じられるだろう。

追い詰められ、人々はこの崖の上に殺到した。家族は集まり輪を作り、最後の手榴弾を炸裂させた。深い深い断崖だ。大波が寄せ、高いしぶきを上げている。いやがる子供を抱えて飛び込む者、女達はアメリカ兵をおそれてつぎつぎ飛び降りた。ぼくはその場面を実写フィルムで見て知っている。

この恐ろしい光景が繰り返されたとき、すでに海上には米軍が進出し、投降を呼びかけ、身投げを諦めるようアナウンスを繰り返していたという。それでも人々の投身は止まなかった。マツビ山の「シューサイドクリフ」の自殺者と合わせて4,000人近くがこの島の北端で死んだと言われている。

ぼくはまもなくここを去る。ぼくを乗せ、B 757機は、テニアン島の右を上昇し、1944年11月24日東京爆撃に発進したB 29超重爆撃機94機、また、翌年3月9日夕方離陸した334機と同じコースを硫黄島までとり、そこから、次の11日名古屋爆撃へ向かった同じコースをとって西に折れるはずだ。

ぼくの頭は悲しみでいっぱいだ。火炎樹の咲く美しいこの南の島だけで、3万の若い日本兵と1万の島民が死に、米軍1万5千人弱が死傷した。死ななくてもいい死を多くの人が死んだ、という思いがつかまとう。玉砕も特攻も、広島も長崎も、避けられた悲劇だった。戦死の公報が届き、久人さんの遺骨が帰ってきた日、ぼくは祖父母に連れられ、迎えに行った。特攻隊員の遺骨が還ることなどないことを知りつつ、遺骨を開き、親戚みなどで泣いた。

一昨日ツアーで出会ったあの老学徒兵も、あの断崖に立っただろう。本でしか歴史を知らないぼくより、彼の悲しみは大きかったはずだ。

まもなく、学校が始まる。若者の命は尊い。若者の命はねらわれやすい。ぼくが担当する250人に向かって、憲法がなにより大切なのだと言おう。タイではほぼ100%の、中国では83%の人が自分の国籍を誇りにしているそうだが、アジア10カ国で一番ピリでもよいではないか、資源確保目的だけの侵略戦争で迷惑をかけたことを恥じつつけているのなら。大国意識を持たないようにしよう、ロシアに勝った思い上がりで国を誤らせたことを忘れまい、と言おう。そして、政治家には警戒を怠るまい、と言おう。昔も今も、彼らには自分の命を投げ出す気など、初めからないのだから、とも。